

第2回若狭地区高校教育懇談会

協 議 資 料

【目 次】

- | | | | | |
|-----|------------------------|-------|---|---|
| I | 第1回若狭地区高校教育懇談会における主な意見 | …… | P | 1 |
| II | 若狭地区の県立高校の現状と課題 | …………… | P | 3 |
| III | 高校再編整備による新しい高校の設置事例 | …………… | P | 5 |
| IV | 若狭地区の県立高校再編整備の方向性について | ……… | P | 9 |

I 第1回若狭地区高校教育懇談会における主な意見

1 再編整備計画について

- 将来、生徒数の減で、高校の適正規模が課題になることは認識しているが、再編に当たっては、高校、地元、OBの意見を聞く機会をできるだけ設けて欲しい。
- 高校再編問題の出発点が、児童数、生徒数の減少から出発している印象を受けたが、数あわせの再編ということにならないか。
- 地域で人口、生徒数を増やす努力が必要で、県、学校、地域などの役割分担の議論も必要と考える。
- 小規模校には、ゆとりのある教育、きめ細かい教育ができるという良い一面もある。適正規模はあると思うが、一概に学級数がいくつ以上なければならないというものではないと思う。
- 県立高校においても、生徒数をいかに確保すべきか、学校間競争に勝ち抜くような経営計画を立てるべき。
- 中学生の子どもたちは、多様な部活動のある学校、友人関係の保てる学校、将来への可能性が広がる学校という見方で進路先の高校を選ぶ傾向がある。
- 小浜でレベルの高い学習ができるような再編をして欲しい。
- 嶺南地域の専門学校として、調理師、介護福祉分野等の資格取得などで、できることを協力したい。

2 職業系専門学科について

- 資格取得、県立大学の連携や先生方の民間からの採用など、全国的に独創的でユニークな取り組みをする県立高校があってもよい。
- 職業高校は、あまり専門化せず普通教育を大事にすべき。普通教育のカリキュラムをしっかり学習した上で、専門学科の職業に興味を持たせることを基本にして、計画を策定したらどうか。

3 若狭地区の県立高校について

- 各若狭3校の学校の先生方で十分意見を交わして、特徴を残して今後の発展に努力して欲しい。
- 若狭高校は、もっと力を出して、嶺南から福井の高校へ行く生徒を減らしてもらいたい。
- 全国で唯一の若狭高校のホーム制がなくなったことについて、再検討の余地はないか。
- 若狭高校の理数科を特別クラスの形にして、後で文と理の選択ができるようにすればどうか。

- 若狭農林高校を普通高校の名称に変え、農林分野を狭めたことは、地域にとって損失であったと思う。
- 小浜には魚と民宿があり、調理師の資格を取得するコースがあるとよい。また、水産高校と若狭東高校をミックスしたコースで、いろんな資格を取得できるとよい。
- 県立大学が日本海側で唯一の水産系学部を持っているように、福井県内に水産高校が残ることも必要である。
- 再編整備は避けて通れないと思うが、なんとかして「水産」を残してもらいたい。
- 水産高校は存続が必要だと思うが、卒業生が入学当時の半分になる状況は問題。
- 県内唯一の単独水産高校は存続させたいが、生徒の希望が無ければ仕方がないという思いもある。
- 小浜水産高校には、不登校の経験者など多様な生徒が入学している。そうした生徒たちが、クラゲのクッキーやミジンコを宇宙へ送るなど、特色ある活動をしている。
- 再編で水産学科を盛り上げ、子どもたちが進んで選択し、希望を持つことができる学科にすることも必要。
- 水産高校における商品化のための試行錯誤も、地域産業に大事な役割を果たしている。
- 県外、韓国や中国からも、子どもたちの交流ができる高校づくりを考えてもらいたい。
- 小浜水産高校は良く頑張っている。新聞報道にもあるように、地域との連携、地域貢献は県内では最大であると思う。

Ⅱ 若狭地区の県立高校の現状と課題

1 現状

- 普通系、職業系、総合学科の定員をみると、嶺南は、嶺北に比べ職業系学科の規模が大きい（普・職の比率がほぼ1：1）。
- この理由には、これまで生徒数の減少に、主に普通科系学科のクラス数を削減することで対応してきたことが挙げられる（職業系専門学科は、定員数が最低限に近くなっているため、削減できない）。

【平成22年度募集定員】

地 区		普通系		職業系		総 合		計	
		人	%	人	%	人	%	人	%
嶺 北	福井・坂井	1,836	65.3	977	34.7	—	—	2,813	100.0
	奥 越	345	62.1	211	37.9	—	—	556	100.0
	丹 南	913	65.9	288	20.8	185	13.3	1,386	100.0
	小計（A）	3,094	65.1	1,476	31.0	185	3.9	4,755	100.0
嶺 南	二 州	323	51.7	302	48.3	—	—	625	100.0
	若 狭	328	52.1	302	47.9	—	—	630	100.0
	小計（B）	651	51.9	604	48.1	—	—	1,255	100.0
合 計（A）+（B）		3,745	62.3	2,080	34.6	185	3.1	6,010	100.0

- 公立高等学校の収容定員は、「公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律（標準法）」により規定されており、本校としては、最低240人（1学年あたり80人）が必要。
- 収容定員は、教職員定数の算定基準。

標準法	施行令						
<p>（公立の高等学校の適正な配置及び規模）</p> <p>第4条 都道府県は、高等学校の教育の普及及び機会均等を図るため、その区域内の公立の高等学校の<u>配置及び規模の適正化</u>に努めなければならない。この場合において、都道府県は、その区域内の私立の高等学校並びに公立及び私立の中等教育学校の配置状況を十分に考慮しなければならない。</p> <p>第5条 <u>公立の高等学校における学校規模</u>は、その生徒の収容定員が、本校又は分校の別に従い、<u>本校にあつては240人</u>、分校にあつては政令で定める数を下らないものとする。ただし、本校における生徒の収容定員については、夜間において授業を行う定時制の課程のみを置くものである場合その他政令で定める特別の理由がある場合は、この限りでない。</p>	<p>（分校の収容定員等）</p> <p>第1条 公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律（以下「法」という。）第5条本文の政令で定める生徒の収容定員の数は、次の表の上欄に掲げる分校の区分に応じ、それぞれ同表の下欄に掲げる数とする。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分校の区分</th> <th>生徒の収容定員の数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>すべての学年の生徒を収容する分校</td> <td>100人</td> </tr> <tr> <td>前項に掲げる分校以外の分校</td> <td>60人</td> </tr> </tbody> </table> <p>2 法第5条 ただし書の政令で定める特別の理由がある場合は、当該公立の高等学校が学校教育法（昭和22年法律第26号）第71条の規定により中学校における教育と一貫した教育を施すものである場合とする。</p>	分校の区分	生徒の収容定員の数	すべての学年の生徒を収容する分校	100人	前項に掲げる分校以外の分校	60人
分校の区分	生徒の収容定員の数						
すべての学年の生徒を収容する分校	100人						
前項に掲げる分校以外の分校	60人						

- 小浜水産高校は、現在、標準法の規定からみて、本校として成り立つ最低限の規模となっている。
- 直近3年間の中学生の志望動向をみると、若狭東高校、小浜水産高校は、志望者数が定員数を下回っている。

学校名	学科名		生徒数 (H21.5 現在)				【22年度】	
			1年	2年	3年	計	定員	志望者
若狭高校	普通科		193	210	213	616	228	288
	理数科		38	35	35	108	38	46
	商業系	商業科	35	35	34	104	37	83
		情報処理科	35	36	36	107	37	
	計		301	316	318	935	340	417
若狭東高校	普通科		61	50	60	171	62	44
	農業系	産業技術科	36	32	32	100	36	68
		生活科学科	35	34	32	101	36	
	工業系	電子機械科	30	24	25	79	33	45
		電気科	30	28	27	85	33	
	計		192	168	176	536	200	157
小浜水産高校	海洋科学科		30	22	23	75	30	48
	食品工業科		26	27	25	78	30	
	水産経済科		23	21	22	66	30	
	計		79	70	70	219	90	
	専攻科		1	3	—	4	—	—

2 課題

- 小浜水産高校は、教員数の確保や、生徒への教育効果、学校の活力維持の観点から考慮しても、これ以上の定員や学科数の削減は困難。
- 現在の3校体制を維持することを前提として、今後の生徒数の減少に対応するためには、普通系学科の定員数や、現在複数設置されている職業系学科の学科数の削減を余儀なくされる。
- 例年志望者数が定員数を下回っている学科については、魅力づくり、特色づくりが重要。

Ⅲ 高校再編整備による新しい高校の設置事例

鳥取県立境港総合技術高等学校（鳥取県境港市）

1 沿革

- ・ 平成10年3月の高等学校教育改革基本計画に基づき、再編。
- ・ 境港工業高校、境水産高校、境高校家庭科を統合し、平成15年4月に開校。
- ・ 校地は、旧境港工業高校。

2 学校規模

1 学年6 学級規模

3 開設学科

（1）水産学科

- ① 海洋科：水産・海洋の基礎・基本の学習
- ② 食品科：食品の製造・加工、氷温技術、食品衛生

（2）工業学科

- ① 機械科：ものづくりの基礎・基本の学習、第一種自動車整備士養成施設に認可
- ② 電気電子科：電気・電子・情報に関する学習

（3）商業学科

- ① ビジネス科：流通、簿記、情報処理に関する学習

（4）福祉学科（平成15年度開設）

- ① 福祉科：ホームヘルパー2級、介護福祉士国家資格受験資格取得可能

4 特徴

- ・ 総合選択制により、2年次から他の学科の科目を一定範囲で選択（2年次4単位、3年次8単位）。
- ・ 1年次に、各学科の生徒全員が体験航海に参加。
- ・ ミックスホームルーム（1年次に、所属の異なる生徒がひとつのホームルームに所属し、交流する。）を実施。学校としての一体感が生まれ、生徒からも好評。
- ・ 福祉、電子電気、機械科の生徒の連携による福祉のものづくり学習「テクニカルハート」や、各学科の研究成果を展示・販売する「総合技術フェア」等、総合技術学校として、学科が連携した取組みに力を入れている。
- ・ マナー向上、地域のゴミ拾いなど、生徒自らの提案による地域貢献活動を実施。

1 沿 革

- ・ 館山高等学校（工業、商業、家政）と安房水産高等学校との再編により、平成20年4月に開校。
- ・ 校地は旧館山高等学校。
- ・ 海洋科については海洋実習日のみ、旧安房水産高校の校舎（水産校舎）を使用。
- ・ 千葉県では平成14年から再編がスタートし、県内148校を現在129校に、さらに120校にする予定。

2 学校規模

1 学年6 学級規模

3 開設学科

（1）全日制課程

- ① 家政科（3コース）：被服文化、食物栄養、保育福祉
- ② 商業科（3コース）：情報、会計、商業
- ③ 工業科（3コース）：電気、化学、工業
- ④ 海洋科（4コース）：資源生産、海洋工学、栽培、食品

（2）定時制課程（普通科）

（3）専攻科

- ① 漁業コース
- ② 機関コース

4 特 徴

- ・ 海洋科は定員80名（2クラス）。1年は各科の共通のカリキュラムで学習し、2年から4コースに分かれる。専門教科のみをコースに分けて少人数指導をするので、2年次、3年次もクラスは2クラス。
- ・ 海洋科では1年生は週1日、2、3年生は週3～4日水産校舎へ登校。
- ・ 資源生産コースと海洋工学コースが実習船を使用（栽培コースも2週間程度の沿岸航海あり。）。
- ・ 実習船の千潮丸（499トン、H18 竣工）は銚子商業高校海洋科と共同で利用。ハワイ方面への遠洋航海が年2回、その他沿岸航海や体験航海に利用。
- ・ クラスは固定し、専門の授業だけコースに分かれる（専門の科目は少人数指導）。
- ・ 就職は6割。今年3月卒業生の漁業・船舶関係への就職は7人。専攻科（5～6人）はすべて船舶関係へ就職している。

1 沿 革

- ・ 平成18年3月に策定した「高校再編整備方針」に基づき、再編整備を進行中。
- ・ 小規模化が著しい海部郡の県立高校4校の再編を実施。徳島市内の工業高校2校、海部郡の水産高校を統合し、科学技術高校として平成21年4月開校。
- ・ 水産高校については、平成19～20年まで募集停止、平成21年4月から徳島科学技術高校の海洋科学類、海洋技術類として募集再開。
- ・ 水産高校の一部は実習施設として使用。それ以外の本校舎等の利用方針は今後検討。

2 学校規模

1学年11学級規模（1クラス約10～30人）

3 開設学科

（1）全日制課程：2年次からコースに分かれる

①総合科学系 ⇒ 大学進学

- ・ 総合科学類 → 2コース（情報科学、環境科学）
- ・ 海洋科学類 → 1コース（海洋科学）

②総合技術系 ⇒ 高度な資格の取得

- ・ 機械技術類 → 2コース（機械、生産システム）
- ・ 電気技術類 → 2コース（電気、情報通信）
- ・ 建設技術類 → 3コース（環境土木、建築、総合デザイン）
- ・ 海洋技術類 → 1コース（海洋総合）

（2）定時制課程（工業科）

- ・ 機械類 → 2・3・4年：1コース（機械）
- ・ 工業技術類 → 2・3・4年：2コース（電気、建築）

4 特 徴

- ・ 生徒募集は類ごとに実施。2年次から各類に属するコースに分かれて学習。
- ・ 工業教育と水産教育をともに展開することの長所を生かし、教育課程上の連携や施設・設備等の相互活用を図る。
 - ⇒環境系の生徒が海洋環境等について実際の海域での水質分析、生物観測等を行う
 - ⇒土木系の生徒が潜水士の資格を取得することにより、海洋土木、開発関係の職種等への就職幅を広げる
- ・ 再編に当たり、水産教育については内容を転換。
 - ⇒大型実習船による海技士養成教育から小型実習船による海洋教育へ
 - ⇒遠洋漁業教育から沿岸漁業教育へ

1 沿 革

- ・ 多度津工業高校と多度津水産高校を再編統合し、平成19年度から多度津高校となる。
- ・ 校地は旧多度津工業高校。

2 学校規模

1 学年6 学級規模

3 開設学科

(1) 全日制課程：2年次からそれぞれの興味や希望に応じたコースに分かれる

① 工業科

- ・ 機械科：2コース（機械、電子機械）
- ・ 電気科：2コース（電気、電子）
- ・ 土木科：コース設定はなし
- ・ 建築科：コース設定はなし

② 水産科

- ・ 海洋技術科：2コース（航海技術、機関工学）
- ・ 海洋生産科：2コース（食品科学、栽培技術）

(2) 専攻科

① 漁業科

② 機関科

4 特 徴

- ・ 1学期に1年生6クラスがクラス単位で6日間、実習船「香川丸」による研修航海を実施（生徒には好評）。
- ・ 水産科の実習は旧水産高校を使用。
- ・ 専門教科を中心に少人数教育を行い、学習の定着を図る。
- ・ 職場体験やボランティア活動などを通して地域との連携を深める。

Ⅳ 若狭地区の県立高校再編整備の方向性について

1 若狭高校商業科（商業科、情報処理科）

- ・ 卒業生の7割が進学しており、進学先は大学が最も多く、次いで専修学校、短大の順となっている。
- ・ 就職に当たっては、事務職に就く者の割合が高い。

【卒業者の進路状況】

[※上段は人数(人)、下段は割合(%)]

卒業年月	進 学				就 職	その他	合 計
	大学	短大	専修等	小計			
H19.3	29	5	17	51	21	0	72
	40.3	6.9	23.6	70.8	29.2	0.0	100.0
H20.3	25	2	22	49	21	1	71
	35.2	2.8	31.0	69.0	29.6	1.4	100.0
H21.3	19	8	20	47	20	1	68
	27.9	11.8	29.4	69.1	29.4	1.5	100.0
3年間の平均	24.3	5	19.7	49	20.7	0.6	70.3
	34.6	7.1	28.0	69.7	29.4	0.9	100.0

- ・ 例年、志望者数が定員数を上回っている。1次募集の段階で定員を満たしており、2次募集は行っていない。

【志望者、定員、合格者数の推移(直近4年間)】

区 分	志望者 ※	定員	推薦 合格者	1次募集		2次募集		合格 者計
				受験者	合格者	受験者	合格者	
H19	95	35	12	25	23	—	—	35
			16	21	20	—	—	36
H20	101	36	10	26	26	—	—	36
			16	20	20	—	—	36
H21	87	35	10	29	25	—	—	35
			16	21	19	—	—	35
H22	83	37	—	—	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	—

※例年9月に実施する進路志望調査結果による（以下同様）

【再編整備の方向性(案)】

- ・ 職業系専門学科としての専門性の向上
- ・ 大学への高い進学希望に対応した教育体制の整備

2 若狭東高校

◆農業科

- ・ 卒業生の4割以上が進学しており、進学先は専修学校等が多い。
- ・ 卒業生で農林業に就職した者は極めて少ない（直近では21年卒業生1名のみ）。

◆工業科

- ・ 卒業生の3割程度が進学しており、大学への進学率も比較的高い。
- ・ 卒業生の就職先は主に製造業であり、学科との関連性は高い。

【卒業者の進路状況】

〔※上段は人数(人)、下段は割合(%)〕

卒業年月	学科	進学				就職	その他	合計
		大学	短大	専修等	小計			
H19.3	農業	10	4	19	33	33	1	67
		14.9	6.0	28.4	49.3	49.3	1.4	100.0
	工業	7	1	15	23	43	1	67
		10.4	1.5	22.4	34.3	64.2	1.5	100.0
H20.3	農業	5	7	18	30	29	3	62
		8.1	11.3	29.0	48.4	46.8	4.8	100.0
	工業	4	0	13	17	36	0	53
		7.6	0.0	24.5	32.1	67.9	0.0	100.0
H21.3	農業	5	4	10	19	44	0	63
		7.9	6.4	15.9	30.2	69.8	0.0	100.0
	工業	8	1	4	13	35	0	48
		16.7	2.1	8.3	27.1	72.9	0.0	100.0
3年間の平均	農業	6.7	5	15.7	27.4	35.3	1.3	64
		10.5	7.8	24.5	42.8	55.2	2.0	100.0
	工業	6.3	0.7	10.7	17.7	38	0.3	56
		11.2	1.3	19.1	31.6	67.9	0.5	100.0

- ・ 例年、工業科の志望者数が定員数を下回っている。
- ・ 20年度において2次募集を行ったが、受験者はなく、合格者数が定員数を下回っている。

【志望者、定員、合格者数の推移(直近4年間)】

区 分			志望者	定員	推薦 合格者	1次募集		2次募集		合格 者計
						受験者	合格者	受験者	合格者	
H19	農業	産業技術	52	33	4	29	29	—	—	33
		生活科学		33	8	27	26	—	—	34
	工業	電子機械	23	30	2	28	27	1	1	30
		電気		30	3	27	27	—	—	30
H20	農業	産業技術	79	36	2	33	33	0	0	35
		生活科学		36	9	26	26	0	0	35
	工業	電子機械	40	30	4	25	24	0	0	28
		電気		30	1	28	27	0	0	28
H21	農業	産業技術	86	35	3	32	31	1	1	35
		生活科学		35	9	26	26	—	—	35
	工業	電子機械	40	30	3	26	26	1	1	30
		電気		30	0	30	30	—	—	30
H22	農業	産業技術	68	36	—	—	—	—	—	—
		生活科学		36	—	—	—	—	—	—
	工業	電子機械	45	33	—	—	—	—	—	—
		電気		33	—	—	—	—	—	—

【再編整備の方向性(案)】

- ・ 職業系専門学科としての専門性の向上、魅力づくり
- ・ 多様な学習ニーズ、進路希望への対応
- ・ 学習内容と進路先とのミスマッチの解消(農業科)

3 小浜水産高校

◆海洋科学科、食品工業科、水産経済科

- ・ 卒業生の約6～8割が就職。漁業への就職者は極めて少ない（直近では平成20年卒業生1名）。
- ・ 進学先は専修学校等が最も多い。
- ・ 地域と連携したアマモの定植活動、エチゼンクラゲを活用したクッキーや宇宙食の開発など、全国的にも特色ある活動を展開。

【卒業者の進路状況】

〔※上段は人数(人)、下段は割合(%)〕

卒業年月	進 学				就 職	その他	合 計
	大学	短大	専修等	小計			
H19.3	4	3	25	32	46	0	78
	5.1	3.8	32.1	41.0	59.0	0.0	100.0
H20.3	1	4	19	24	49	0	73
	1.4	5.5	26.0	32.9	67.1	0.0	100.0
H21.3	2	2	7	11	39	0	50
	4.0	4.0	14.0	22.0	78.0	0.0	100.0
3年間の平均	2.3	3	17	22.3	44.7	0	67
	3.4	4.5	25.4	33.3	66.7	0.0	100.0

- ・ 例年、志望者数が定員数を下回っている（定員数の約5割）。
- ・ 特に水産経済科の受験者が少なく、毎年2次募集を実施。

【志望者、定員、合格者数の推移(直近4年間)】

区 分	志望者	定員	推薦合格者	1次募集		2次募集		合格者計	
				受験者	合格者※	受験者	合格者		
H19	海洋科学	52	30	4	27	26	—	—	30
	食品工業		30	2	29	28	—	—	30
	水産経済		30	1	28	28	3	1	30
H20	海洋科学	41	30	3	22	24	1	0	27
	食品工業		30	2	30	28	—	—	30
	水産経済		30	2	27	27	0	0	29
H21	海洋科学	47	30	4	32	26	—	—	30
	食品工業		30	8	14	16	2	1	25
	水産経済		30	0	18	19	3	3	22
H22	海洋科学	48	30	—	—	—	—	—	—
	食品工業		30	—	—	—	—	—	—
	水産経済		30	—	—	—	—	—	—

※1次募集の合格者には、他科との併願を含む。

◆専攻科

- ・ 毎年10名程度の募集に対して、入学者は1～5名程度。

【専攻科の定員、入学者数の推移(直近5年間)】

年 度	H17	H18	H19	H20	H21
募集定員	約10	約10	約10	約10	約10
入学者数	3	1	5	3	1

【再編整備の方向性(案)】

- ・ 学習内容と進路先とのミスマッチの解消
- ・ 生徒や社会の多様なニーズに対応した教育体制の整備
- ・ 今後の水産教育の在り方の検討、特色ある水産教育の展開
- ・ 今後の専攻科、実習船の在り方の検討